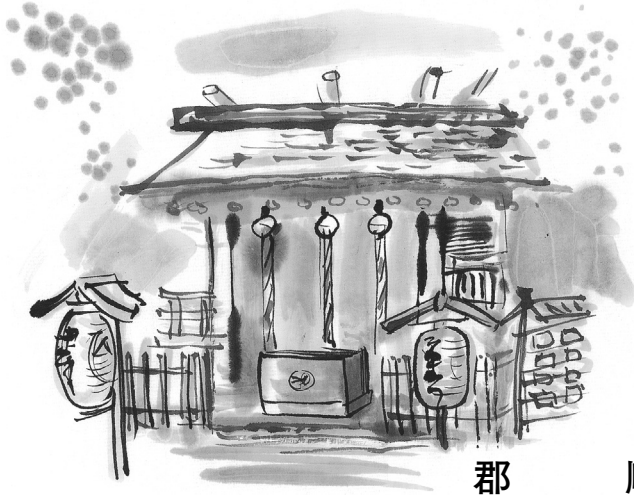


小説・江戸神仏歳時記 (20)

かいちゅういなり

新宿・皆中稲荷神社



郡 順 史

多くの読者の方々は、この神社のお名を示されても、正しく読める方は極めて少ないのではなからうか。たとえ読めても、しからばどんな神さまをお祀りし、どんな由緒、ご利益があるのだろうか、と小首をかしげるのではなからうか。

実はこの近所の柏木という所に生まれ育った筆者も、幼い頃よくお祭りに行ったり、境内で友だちと遊んだりしたのだが、この神社のご祭神もご利益もまったく知らなかった。ただ「かいちゅう神社」と言っていたのみである。

ではこの神社ならびにご祭神は、如何なるご由緒をお持ちで如何なるご利益を下さるのであるのか。

ずばり言ってしまうと、宝くじ、競輪、競馬、パチンコ、花札などなど、要するに賭け事にご利益を下さる、と言うのである。むろん神社側さんは「そんな事はありません。家内安全、火難、盗難、交通事故、旅行などの安全安心、受験合格など、一身ならびご家族をお守り下さいませ」と仰いますが、それはどこの神社とも同じで庶民には面白くないので、参拝者はご由緒から連想して、ご利益の特異性をつくり上げほとんど勝手に拝み、「当たった! はずれた!」と喜んだり悲しんだ

りしているのだ。

さはさり乍ら、ではこの神さまはどうして賭け事に百發百中すなはち皆中（みなあたる）のご利益をさずける、ことになったのであろうか。それを解きほぐすには、この神社の歴史や逸話を語らなければなるまい。

徳川家康が江戸に幕府を開く以前から、ここには神社があつた。ご祭神の御名は、「倉稻御魂之大神」「伊邪那岐之大神」「伊邪那美之大神」「諏訪大神・日本武命」そして天文二年「稲荷之大神」が合せ祀られる。このすべてがいわゆる天神（日本古来の天孫神）で、同じご祭神の神社は日本國中処々方々にあり、失禮乍ら珍とはしない。

さて江戸幕府が関ヶ原の合戦、大阪夏の陣で勝利し、江戸に幕府を開き一応は安泰にみえたが軍備はおこたる事なく、三代將軍家光のとき、この地に伊賀同心の鉄砲弓矢の百人組を置いた。（この由を以て、この地一帯を百人町と呼んだ）

伊賀組の同心たちは矢場鉄砲場で毎日弓を射、鉄砲を放つて練習に励んだ。

しかし時代の流れは愈々偃武（武器をおさめぬこと）の色濃くなり、退屈な平和の日々が続くとは厭（あきら）む。同心達も同じ、稽古もなおざりになつていき、矢も鉄砲も的に当らなくなつてゆく。

「これではいかん！ もし合戦がはじまつたら一大事じゃ」

と叫んだのが総指揮者の内藤修理亮であつた。（内藤は内藤新宿で有名な大名）

内藤はすぐさま百人組を集めて、

「組内、近ごろ懈怠の風みなぎりたりと聞き及ぶ。もし真実ならば、一人一人呼び付け問い正さんか」と告げた。

百人組の連中はふるえ上つた。たしかに近頃稽古にもあまり励んでいない。矢も鉄砲もひどく的に当らなくなつている。そこを指摘されたら一も二もなく閉門か追放だ。追放されたら浪人だ。いま貫つている奉祿はたったの三十俵だが、それを失えば食うのも困るし、組屋敷も追い出され伊賀組同心という名誉も失う、この危機は何としても切りぬけねばならぬ、と頭をかかえた。

中でも深刻にふるえ上つたのが一番組の組長の齋藤伝八郎（假名）であつた。

百人組は三組に分かれていた。四十人、三十人、三十人の三組であり、齋藤が一番組の組頭で、責任を問われるとしたら一番重いのだ。

齋藤組長はある夜ひそかに組員を集めて、一人一人弓を射させた。（鉄砲では音がするので）そして落胆、驚いた。何と四十人の同心のうちの中央を射たのは、たった一人なのである。あとは的

の周囲を射たのは良いほうで、中ではとんでもないのはずれに矢を飛ばしたりしているのだ。

——これでは全員閉門追放だ。なんとかせねばならぬ。

斎藤はこの惨憺たる結果に、顔色を蒼くして心の臓をふるわせた。そしてどうしたら内藤総指揮が指定してきた試験日までに、全員と言わないまでも、まあまああの成績を見せられるか、頭が痛くなった。

もつとも悩みは斎藤組長だけではない、百人組総員であるが、特に斎藤は一番隊組長だけに苦悩は強かった。

試験日までに毎夜毎夜、組員を集めて稽古させようか。それとも中に上手な者だけに猛訓練をさせてその者だけを試験日に出場させて、当面を糊塗してこの危機を一時でも切り抜けようか、と朝から晩まで考えて、何も手に着かず夜も眠れなかった。

二

そんな或夜の事である、浅い眠りを繰り返かえしている眺近くであった。

「伝八郎、伝八郎」
と枕許で名を呼ぶ声を聞いた。

斎藤は自分では目覚めたつもりで、その声の方を眼を向けた。そして「あっ！」と息をのんだ。

何と、その視線の先に、神社で絵に描かれた倉稻御魂之大神にそっくりな、白髪で瘦せて杖を突いた老神が微笑しながら立っていたのである。

斎藤は息をのんでしばし見詰めるばかりであった。

するとその老神は、懐中から一枚の紙片をとりだし、振りながら、

「お前の組長としての責任感、義を大事にする心が氣に入ったゆえ、その苦悩から解き放つて進せよう。明日より七日の間、この紙片を両の掌にはさみ稲荷の大神に、矢弾がごとごとくの中するよう祈願申し上げよ。さすれば必ず大願成就するであろう」

とおごそかに告げ、そしてすーっと消えて行った。

はっと目覚めた斎藤は、老神の姿を追い求めたが、すでにその姿は見ることは出来なかつた。そして更に「あっ！」と驚いたのは、一枚の紙片を右手に固く握りしめていることであつた。

だがその紙片は、日頃鼻悪く水ばなをかむために枕許に置いてあるチリ紙であつた。しかし斎藤はそれを只のチリ紙とは思えなかつた。老神が両掌にはさんで祈願せよと告げ下さつた神の願紙と信じ、急いで起き上り、顔を洗い、髪を整え、嗽

手水に身を清め、神社へすつ飛んで行った。

そしてまず神々に参詣し、それから矢場へ行き、神の紙片を弓持つ掌に握りしめ、作法通り弓矢をとの的に向かった。

一矢を放ち、「あつー」と驚きの声を放った。なんと矢は、ただ的に当たっただけでなく、今だから当たったこともない、的の中央へびたりと的中しているのである。

驚き興奮した斎藤は、二の矢、三の矢と、次々矢を取っては射た。何とその矢はことごとく一の矢の周囲に、矢尻をふるわせて的に当たったのである。

「ああ、神助だ！ 神のおめぐみだ！」

斎藤は思わず五体を震わせ、声に出して叫んでしまった。

しかしすぐに冷静さをとり戻すと、「この神助、自分だけが戴いても何もならぬ、組内の者すべてが頂戴せねば役には立たぬのだ」と眩き落すと、家へ戻り、早速に組内四十名に集るよう命じた。

そして何事かと集って来た組員へ、

「今より一名ずつ矢を射よ。但し、矢を射る前に、当社の神々に放った矢が必中であるよう祈願せねばならぬ。且つ矢を番えた時、更に的中するよう祈らねばならぬ。この事、疑ってはならぬ、生命かける思いをもって神助を願うように！」

と注意を与えた。

組員はびつくりした。日頃冗談を放って人を笑わせる性格ではない組長が、それにしても生まじめすぎる面持口調で、神、神を練りかえすので、何事、と驚いたのである。

だが組長の言葉命令であるから、なおざりには出来ない。全員、そろそろと神前に向かって掌を合わせ禮拜し、そして組長からチリ紙一枚ずつを貰って再び矢場に整列した。

さて、右端に列んだ者から一人ずつ的に向かって矢を射た。

一番矢を放つと、まっ先に驚きの声を放ったのは、放った当人であった。いつもなら的より離れた所へしか矢が飛んで行かないのに、びしつと音高くのを射抜いていたからである。

むろん驚いたのは見ていた他の組員もであった。中には、

「木村氏、どうなされた、当たったではないか」
からかいでなく、本気でびつくりの声をかけたほどであった。

見事的に射たのは木村だけではない、この後、四十名の者が続々と矢を放ち、はずした者もいるが、一名二矢ずつ放ち計八十矢を放ち、的からはずれたのは僅かに七矢だけだったのである。

「拙者、いつこんな弓が上手（うまく）なった

のであろうか」

「これこそ正に神助であろう。有難し。これで追放される事も無くなった」

「この神、以後皆中とおよび奉るべきであろう」

口々に感謝し、神だけでなく教えてくれた斎藤組長へ掌を合わせて感謝の言葉を告げる者までいた。

三

噂は千里を走る、と言うが一番組の隊士が何も言わないのにこの事はたちまち二番組三番組と伝わり、百人組すべての隊士に知れわたった。殊に各組の組長の関心をよび「捨てはおけない」とばかりに一番組の斎藤組長の所に駆けつけ、

「我々にも百発百中の極意を教えてください」

と頼み込んだ。斎藤は、

「ああいいとも、百発百中、皆中は百人組すべての者の念願だからな」

と言って、事こまかに神拝神願の方法を教えてやった。

各組の組長はただちに隊士に伝え、そして矢場で隊士たちに習練をさせた。

その結果は、皆中とまでは行かなかったが、70、80%という確率で的が射られた。隊士たちは笑顔でバンザイを叫ぶと、尚一層の習練を誓ったので

あった。

噂はまた千里を走った。噂が村に伝わり、そして附近の新宿や中野、更には大木戸を通って江戸市中へと伝播して行き、「変ったご利益をくれる神社さんだな」という囁きあいから、「そんなに矢が的に当るなら、病氣にも、ひよっとするとサイコロの目にも当るんじゃないかな」という噂に転化して行った。

その影響が、神社の賽銭箱の端が切りとられたり、お守り札がよく売れたり、お賽銭がふえたりした。つまりそれだけ参拝者が激増したわけだ。

参拝者の中には、「よい子が産まれますように」と願う産婦や、持病の根元を教えて下さい治して下さい、といったまじめな人々も多いが、その他にも「バクチに勝てますように。百発百中皆中をもつて頼みます」という願をかけるよからぬ者もいる。それらの連中が、賽銭箱の端を削って行くのだ。ちょうど鼠小僧の墓の端を削って行つて身につけ、バクチ事のお守りにする願望と一緒のようだ。

神社側としては、参拝者が増え、お札が売れ、お賽銭が増すのは嬉しいが、賽銭箱が削り取られるのは困る。そこで箱のわきに、

「削り持ち去る者には、ご利益はありません」

という注意書を貼ったが、あまり効果は無かった

という。

ともあれこうして神社は思いがけぬ繁昌をみせるようになり、更に内藤修理亮の監察も無事好成績ですみ、百人組の存在も重味を増した。

そこで神社の名も、今までのただの稲荷神社とただでなく、百人組の進言もいれて、『皆中稲荷神社』と皆中の字句を冠することにした。

これが益々神社の名を高くし、いろいろな願望を持った人々が近在近郷はもとより、信州とか駿河とか遠い他國からわざわざ参詣に来るようになった。

その伝話と伝説は、代々人々に語り継がれてゆき、時代は徳川二百年、明治四十年、大正十五年、昭和六十年、そして平成二十年と三百数十年を経ても変わることもなく、たえまない参詣者の姿となつてあらわれている。

それでも参詣者の願望は、時代によつて変遷がみられるという。

たとえば江戸時代はサイコロ博打、花札賭けなどの勝ち願望、ついで明治大正時代にはバクチに加えて株、商売の取引事などが加わり、更に昭和の前期には出征兵士の武運長久、無事凱旋祈願が加わり、敗戦後には、宝クジや競馬、競輪、交通安全（これは当らないようにと）、などがプラスされ、神さまも多忙になった。

この神社の事にふれた好事家の著述によると、平成になつてからは、神社からいただいたお守り札に自分の名と、願望の対照、たとえば競馬なら馬の名前と騎手の名を書いたりして、神前の樹木の枝に結びつけて行き、願望がかなうと、その結びつけをほめて持ち帰り、賽銭を多分にはずんで箱に入れて行くそうだ。

今日では、こうした他の神社にはない変わったご利益（決して神社側が宣伝したり奨励したりしているわけではない、と）を求めて、普通の日でも百人は下らぬ参拝者で賑わっているという。

以上の事どもを語つて下さつた宮司石川正典さんは、最後に、「でも私は、宝クジを買いませんし、バクチ事も一切やりません」とさわやかな笑顔で仰つた。

とにかく民衆が作ったような、変わったご利益を下さる『皆中稲荷神社』は、今では東京のご真ん中といつてよい新宿区百人町に在るのが面白い。

住所は、東京都新宿区百人町一ノ十一ノ十六番地である。行き方は、山手線で新宿駅から次の一つ目の新大久保駅で降り、改札口を出て左手に行き一分もかからない左側に在る。一度はお参りする価値があると思うが如何。

— おわり —

（次回は、根津権現の予定）

(表紙説明)

■うるしギター

弦を止め、弦の振動を表板に伝えるブリッジはギターの要。ブリッジの出来具合、材質・厚みで音が変わる。

一和堂工芸株式会社

所在地／香川県高松市屋島東町一五七二
電話〇八七―八四―一五三一

ギターリペア中村

所在地／香川県高松市屋島西町二四七四―八〇
電話〇九〇―四五〇八―五三〇四

「酒林」随筆特集 第七十九号

平成二十二年一月一日号

発行人 西野 信也

印刷人 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市亀井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、「一報下さい」。